

# AAINews

APPROPRIATE AGRICULTURE INTERNATIONAL CO., LTD.

国際耕種株式会社

〒194-0013 東京都町田市原町田 1-2-3 アーベイン平本 403

TEL/FAX: 042-725-6250

E-mail: aai@koushu.co.jp

## ブラジル 開ざされた (= セラード) 大地 開発の光と陰

セラードとは、ブラジル中西部から北部に分布するサバンナ地帯であり、そのアルミニウムを含むやせた強酸性土壌は農耕には不適とされ、ポルトガル語で「開ざされた」という意味をもつ。しかし、適切な土壌改良と生産インフラの整備により、総面積 2 億 400 万 ha (日本の約 5.5 倍)のうち約 5 割強が耕作可能といわれてきた。ブラジル政府は 1970 年代半ば以降セラード地域の開発に着手し、その一環として日伯合同官民ナショナルプロジェクトとしてセラード農業開発協力事業「プロデセール事業」が資金 (= 融資) と技術協力の両面から 1979 年より 3 期 22 年にわたり行われた。今回、2001 年 3 月の事業終了を契機に日伯合同による総評価が実施され、その調査に参加する機会を得た。



赤茶色の部分がセラード

事業開始のきっかけは、ブラジルでは 1970 年代前半国内供給と輸出振興のための食料増産が課題になってきたこと、一方日本ではアメリカの大豆禁輸政策による 1973 年の国際相場における大豆価格の大暴騰を経てアメリカ以外に穀物の調達先を求めていた、という両者の思惑が合致したことによる。同事業をはじめとするセラードの地域開発により、ブラジルの大豆生産量はいまや米国につぐ世界第 2 位となり、トウモロコシ、コーヒー、小麦、綿など大豆以外の農産物の生産量の伸びも著しく、世界の食料の安定供給に大きく貢献している。セラードでは、事業による入植農家だけでなく、独自に数千 ha もの規模で順調に営む農家や、米国および地元資本の多国籍穀物商社 (穀物メジャー) による多様なアグリビジネスの創出が華々しい。事業では生産された大豆やトウモロコシを農家から買取り国際市場へのせるばかりでなく、農産物の流通・加工・販売や農家に対して営農資金の貸付けもする。大豆はそのまま食料・飼料用として扱うほか、自社工場で搾油した油はアジアや中東にも輸出され、搾油後の大豆粕も養豚・養鶏の飼料として出荷される。我々が牛豚鶏の肉を沢山食べれば、それだけ大豆やトウモロコシがますます生産されるのだ。また、日本での口蹄疫や狂牛病騒動により欧州産の肉の輸入が激減した際、ブラジルのプロイラーの引合いが増したことは記憶に新しい。

日本の大豆自給率はわずか 6% で、自動車輸出とひきかえにほとんどを米国からの輸入に頼っている。ブラジルからの輸入量はいまだに多いとはいえないが、市場供給量増大による国際価格の安定、低下という面で恩恵を受けている。うらを返せば、米国とは異なり、補助金の少ないブラジルの農家は市場価格の低迷にあえいでいるのだ。インタビューをした本事業の入植農家もその例外ではなく、セラードにおける農業開発の先駆者としての道程は決して楽ではなかった。農業技術が未確立のなかでの入植、干ばつ、ハイパーインフレ、高金利政策や商品作物ゆへの国際相場下落などにより融資は巨額な累積債務となり、その額はなんと数千万ないし数億円単位におよぶ。すべてを清算し、去っていく農家がある一方、やる気と希望を胸に南部から移住し、念願がなつて小作農から地主農となった日系移民をふくむ入植者たちもいる。「債務の増加はインフレ・高金利政策をとった政府の責任であり、我々が返済する義務はない。ただ、現在の市場価格の低迷が経営上たいへん苦しいのだ...」と、悩み憂える姿がそこにあった。それでもたくましく営農を続ける姿は、開拓者魂ゆえなのだろうか。

開発にともなう自然環境や先住者などへの影響はまぬがれない。生態系を守り生物多様性を保全し持続的に農業を営むための取組みが急務であるものいまだ十分とはいえず、セラード固有の動植物相の減少、大規模耕起およびモノカルチャーによる表土の浸食ないしは流出、大量の化学肥料や農薬散布による土壌や水質の汚染、さらに無秩序な大規模灌漑設備の増大による水資源の減少や枯渇等の危機が指摘される。薬草の宝庫といわれるセラードでは、自然とともに採集生活を営む先住民インディオ (保護区がある。) や伝統的な小規模家族農業を経営する農家との摩擦も起こっている。



収穫期のフィジョン豆とセタバットによる大規模灌漑

あまりにスケールが大きく、縁のないマクロな話ばかりのようだが、セラード開発にともなう光と陰は、我々日本人の胃袋にも直結しており地球のうら側の遠い出来事では決していないのである。(ブラジル国 セラードにて 2002 年 4 月 小島冬樹)